

平成29年 3月 3日

## 平成28年度東洋学研究情報センター機関推進プロジェクト実施報告書

### 1. プロジェクト名

「WebAPI 化による東洋学研究情報センターデジタルデータベース資源の新たな活用モデルへの対応と実証研究」

### 2. 申請研究者

(藤岡洋) (東洋文化研究所・助教)

共同研究者

(松田陽) (文学部文化資源学・准教授)

### 3. 研究期間平成28年4月1日から平成30年3月31日(2年間)

### 4. プロジェクトの趣旨、全体計画

東洋学所研究情報センター(以下、センター)には現在23個の保守状態に入ったデジタルデータベース(以下、DB)が稼働中である。その多くは2000年代に構築され、アクセスログ解析によりそのすべてが利用されている状態といえる。一方2010年代からは徐々にDB利用方法は新たなフェーズに入っているといえる。それは人文科学が従来踏襲してきた文献引用をモデルとする「閲覧」からデジタル情報を直接ネットワークを介して行う引用ないし「活用」への拡張である。現在、センターDBでこのフェーズに基づいているものはなく、また国内外のほとんどのDBが同じ問題を抱えている。

本プロジェクトでは、センターDBからその核であるデータマトリクスを抽出し、利用者発のDBを構築も可能にするWebAPIとして提供することで、人文社会科学が遅かれ早かれ取り組まざるを得なくなる新たなDB利用方法論について実証と考察を行う。

### 5. 今年度の研究実施状況

クローズドな研究会を計三回実施した。第一回では現行のセンター・データベース(以下、DB)の管理運用状況の把握を目的とした。本プロジェクトにとって必須であるデータスキーマやプログラム構成の把握のためだが、現状保守・管理のための文書等が研究所では一切残されておらず、当初想定していたより事態が深刻であることが判明した。第二回ではarbdb.iocとして開発途中にある外部開発者とのapi DB設計について意見を交わした。すでに広く活用されているtwitter apiを活用したこの新たな試みは本プロジェクトのapi DBが活用されるモデルとなることが再確認された。第三回では申請者が8年開発に関わり、その後所属機関の問題から5年ほど休眠状態に陥っているDBの復帰計画を共同研究者と

ともに協議した。この DB では第一回研究会で問題となったデータスキーマ等の問題がないため、具体的な api 開発計画に進み、本研究所の DB の api 化に向けたロールモデルとなる可能性が明らかとなった。

## 6. 今年度の研究成果の概要

データベース発の多様な利用可能性についての概念整備は学術世界ではまだ緒についたばかりであることが今年度の研究会から明らかになった。デジタル化されていくデータリソース全般の利用可能性というテーマで、共同研究者として参加している日文研プロジェクト「おたく文化の戦中・戦後」でも持ち上がった。この研究会の議論から多様なデータ利用可能性のモデルとしてレイヤー概念の整理が必要であることが明らかになったため、研究代表者の要請に応じ、「プログラミングによるレイヤー実装構想と抽象化の壁」を執筆し、本年 6 月に『動員のメディアミックス (仮題)』(思文閣) の一節として上梓される見込みとなっている。また本年後半には第一回研究会で明らかとなった問題を解決する端緒として、現行の ecw (www,ricas ドメインを管轄) サーバを OS 刷新する過程でのデータベースのプログラム構成の見える化に前任データベース管理者と取り組んだ。